

## 江戸時代の考証学と折衷派に対する考察

殷 哲 玫

韓国 又石大学校韓医科大学原典医史学教室

本研究では、江戸時代に登場した折衷派の医学思想が、当時の学界の大きな流れの一つであった考証学の発達と、どのような関連を持っているのかについて考察したい。

江戸時代は徳川家康(1543~1616)が征夷大將軍に任命され、江戸に幕府が樹立された1603年3月24日から、薩摩藩・長州藩・天皇の連合軍が江戸幕府を倒して明治に改元された1868年10月23日までの265年間を指す。一方、考証学という学問は、中国の清代になって流行した。一般に宋明理学では、自己の見解に基づいて経書を解釈するための「性理」を重要視する。それに対して、清朝の考証学では経学や史学を研究し、これらの根拠を古典に求めることを重視する。

ところで、安土桃山時代から伝来し始めた金元医学は、江戸前期になるとかなり盛行していた。この金元医学に基づく後世方派への反発として、金元以後の医説を排して、晋唐以前の医学である仲景の処方方を尊重する、古方派の医学思想が登場してきたのである。そして江戸中期に入ると、このような後世方派の医学と、古方派の医学を折衷した折衷派が登場し始めた。

当時、後世方派は陰陽説と運氣説を信奉しており、温補の治法を主としていた。そのため、彼らの治療方法は一過的に過ぎないという批判を免れえなかった。この一方、後世方派を批判した古方派は、仲景の医方に従うというものの、攻法以外に他の治法はないという風潮まで生みだしていた。それが危険をもたらす問題があったのである。

このように後世方派と古方派はともに偏屈な面が多かった。そこで、両者の学説を調和させようとする医家が登場してきたのである。こうした医家を折衷派、または考証学派と称する。折衷派を考証学派ともいうことから、折衷派は当時儒家の考証学の一派であった折衷学との関係が深かったことがわかるだろう。折衷学は漢唐の儒学から訓詁学を導入し、宋明の儒学から義理学を受け入れ、両者を折衷して双方の長所を統合する立場をとる。この折衷学の思想が江戸時代の医学に多くの影響を与えたのだった。

考証学が江戸時代の医学に及ぼした影響を研究するならば、これらを通して伝統医学の背景が似通う韓国・中国・日本の三国で、考証学が医学に与えた影響も史的に比較・研究できると考えられる。中国医学史では、考証学の影響により尊経復古の思潮が起き、金元代以来の学説を排斥するようになったという。韓国の医学史では、その影響があまり大きくなかったと考えられる。しかし、考証学が実学などの学風と相乗しあい、医学の理論的基礎に対する多様な論議が可能になったとも考えられる。日本の医学史において、考証学が後世方派の医学と古方派の医学を折衷させる結果をもたらしたことは、特に注目すべきである。後世方派の医学と古方派の医学を折衷した医学思想が出現したことも注目すべきであるが、それが考証学的な学風と連携しているという点はもっとも重要であろう。そこで本研究では、江戸時代の考証学的な学風に基づいた折衷派の医家について概略した上で、当時の考証学の学術的性格を検討する。そして折衷派の医学思想を深く理解するきっかけにしたいと考える。